

# 非標準黒人英語に於ける「接尾辞の消失」 及び「否定の形成」について

小 澤 清

standard English と nonstandard English の間には発音に於いて差が認められるが、さらに大きな違いは、文法面に見られる。English speaker にとっては、文法の違いは最大の関心事であり nonstandard な文法は強く非難される場合が多く、そのような言語を使う人を厳しく差別する。standard grammar と nonstandard grammar の差は大きく、二つの別々な言語と考えられ、nonstandard な言語は、非論理的即ち欠陥ある言語、明瞭な談話又は思想を伝えることは出来ない言語とさえ言う人もいる程である。しかし、両者の文法面での違いは、全く皮相的なものであり、一方より他方への移し替えは容易に行われる。この二つの言語の違いの程度を知るには、文法的な型に或る程度検討を加えさえすればよいと思われる。

先ず最初に、文法上の可変性と発音上の可変性が緊密に関連している例があげられます。nonstandard English では final consonant の消失はその特徴の一つに数えられていますが、それは文法上の傾向を暗示しています。即ち、もし final consonant の消失が起れば、当然 suffix の消失も起る可能性をはらんでいると言える。<sup>(1)</sup> ここで、suffix の消失について次に multiple negation の形成について考察してみたい。

## Suffix の消失

suffix には 1) Third singular-s 2) Possessive-s 3) Plural-s 4) Past Tense-ed 等がある。

### 1) third singular-s

black speaker の多くは third singular-s をつけない。即ち、

He come to church as early as I.

The gentleman come to see me, but the girl don't.

irregular verb も規則化され、third singular も他の人称と全く区別がなくなっている。

I do it, he do it, they do it

I was, he was, they was

I have, he have, they have となり、

又 We gots to do that; I hates this place. のように、standard speaker が決して使わない所に third singular-s のようなものを使う事実が見られる。このため、black speaker は third person singular-s が必要な所には置かず、逆に必要でない場合につけると逆説的に性急に結論づける場合も出てくる。

しかし、事実はそうではなくて、多くの black speaker は good English では third person singular-s を必要とする考え方を教え込まれてきたが、使用言語の中で third person singular verb を区別する土台がないので、suffix-s の使用を third person singular だけに限定するのが困難なのである。即ち、一般化が拡大しすぎた hypercorrection と呼ばれる例である。standard speaker は hypercorrection の即ち suffix-s の付加の仕方が逆である談話を聞いて、

black speaker は standard English での使い方とは逆であると間違った結論を引き出す。

third person singular-s の消失は古代言語の傾向の論理的結論への到達と考えられる。何世紀にも亘って、English speaker は、徐々ではあるが一貫して動詞活用の繁雑さの減少を目指してきた。third person singular と同じく、second person singular の特別形が見られなくなってから、余り経っていないが standard English は third person singular-s に固執することによって、完全な規則性を保持していない。これは O E の非常に精巧な組織の名残りであり、black speaker が、その -s を省く時、English Verb の規則化の最終段階に入っていると考えられる。

## 2) The Possessive-s

Black speaker の speech の中で、possessive-s が消失する可能性は third person singular-s と比べると小さい。black speaker は possessive-s を付けたり、付けなかったりするが、この suffix は勿論 third person singular-s より重要な意味を持っている。それが用いられない時にはそれに代るものが必要となり、即ち possessive は何らかの形で示されなければならないが、black speaker は possessive の他の印である前置詞 'of' を頻繁に使う。もし 'a leg of the horse' と言えば a horse's leg と言わなくても済み 'of' を用いて所有の意味を表せば、所有の観念は十分伝わる。しかし black speaker の多くは「所有」を表わすのに、その明らかな印をつけないで、ただ、所有者の名前を所有されるものの前に置くこともある。

That girl handbag is full of money.

この意味を明瞭にするには文脈で十分である。

black speaker は standard English に於ける 2 つの possessive pronoun 'your' 及び 'their' をそれぞれ 'you' 'they' にしてしまっている。つまり、'you' 及び 'they' は subjective, possessive の両格に用いるのである。standard speaker にとって、これは危険な曖昧さを持たむと印象を与えるかもしれないが、何の困難をも惹起しないのは、standard English で 'her' が possessive, objective の両格を兼ねて特に問題ないのと同じである。このどちらの場合も、文脈によって意味が不明になる恐れは全くない。

They drove off in they car.

しかし、その他の所有格は、'you' 'they' より厳格に守られている。しかし、southern black speaker では 'he book, him book, we book' といった表現が見られるという報告があるが、とにかく、possessive form の消失が曖昧さを作り出さないということは明らかである。possessive は他の方法で容易に表示出来るのである。

## 3) Plural-s

英語に於いて、third person singular-s, possessive-s 及び plural-s の 3 つが同一の発音であるということは奇妙な一致といえよう。third person singular-s 及び possessive-s は black English では失われているが、plural-s は根強く残っているのは、その消失が単に発音に於ける変化の問題でなかったことを示している。そうでなければ、この 3 つの suffix-s は同じ運命を辿っていたであろうと思われる。3 つの suffix-s のうちで plural-s が断然、重要なのである。というのは、plural-s が、単語及び文に決定的な影響を与えるからである。もし、plural-s が third person singular-s のように脱落していたなら、英語の中に急激な変化が起ったであろう。

black speaker は複数形を十分確立しているが、その作り方は standard English とは異なる場合がある。即ち、standard English の irregular plural は時には規則化される。'feet' の代りに 'foots' は普通であり、又、既に irregular plural になっているものに suffix-s を

つける double plural が現われたりする。

‘mens’ ‘childrens’

black speaker が singular の単語を特別に発音する所では plural にも影響がある場合がある。black speaker が ‘desk, test, ghost’ を ‘dess, tess, ghoss’ と発音する所では、それぞれの plural を ‘desses, tesses, ghosses’ と発音するのは当然である。これは ‘glass’ や ‘dress’ の plural を ‘glasses’ ‘dresses’ とするのと同じであるからである。数字と共に用いられる語の中には plural を全く欠いているものもある。‘three cent’ ‘seven year’ は一般的で、plural が既に数字によって明白に示されているので、plural-s を付けても意味上では何も加えるものがないからである。これらの少数の例外を除くと、plurality は black English では standard English と同様に機能していると言える。

#### 4) Past Tense-ed

black speaker には final ‘t’ と ‘d’ は弱化或いは脱落する場合がある。spoken standard English では、Past Tense はこれらの音の一つで表わされる場合が殆んどであるので、これらが失われると、過去時制を表わすものがなくなる恐れが出てくる。この場合 black speaker は Past Tense を持たない者もいるという印象を持ってしまい standard English speaker も出てくるが、実態はずっと複雑である。

第一に、人は話しをする時には必ずしもあらゆる場合に Present と Past を区別する訳ではないということである。standard English には Present, Past の区別がない ‘cut’ ‘hit’ のような irregular verb があるだけでなく、書かれた -ed は実際に発音されない場合もある。発話時に明瞭な発音が要求されない場合、‘I walk downtown.’ ‘I walked downtown’ の区別は必要ない。Black English は standard English とは ‘-ed’ が発音時に消失する場面が多いという点と、Present, Past は同一である動詞が多いという点で異なるのである。black speaker には ‘say’ の Past は ‘say’ であり、又 ‘say’ は普遍的な動詞なので、‘She say it to me yesterday.’ という文は black speaker には Past Tense が欠けていると印象を standard speaker に与える可能性がある。

‘-ed’ と綴られる irregular verb の suffix は殆んど black speaker が使っているが、standard English の場合よりも発音されないままになる度合いが多い。standard English speaker は ‘I turn the stove on.’ と ‘I turned the stove on.’ は区別出来ないかもしれないが、black speaker は ‘I turn it on.’ と ‘I turned it on.’ の区別が殆んど出来ず、standard speaker は間違ふことのない ‘I play it on.’ と ‘I played it on.’ も区別出来ない場合がある。black children の speech では Past suffix はかなり弱化しているので最初の読み方を覚える時、書かれた -ed を理解するのに困難を覚える子もいる。

black speaker の殆んどは ‘-ed’ を確かに発音しているが、又、大抵の black speaker の speech では Past は積極的な役割を果している。多くの一般的な動詞には ‘-ed’ suffix の付加によるよりもその他の変化で Past を示す irregular verb があり、これらは black speaker に残っている。(‘gave, told, got.’) past tense が母音変化 ‘t’ 或いは ‘d’ の付加によって表わされる所では、final consonant の消失は present と同一な past を作り出さず、これらの形も生き残っている。black speaker の中には ‘brought’ の代りに ‘brung’ のような少数ではあるが nonstandard irregular past を用いる者も見受けられ、これらは standard form と同様はっきり present と past を区別している。だから past suffix の弱化の傾向にもかかわらず、category としての Past は black English では third person singular-s のように消失することにはならないのである。

### Contraction of 'is' and 'are'

Colloquial standard English では suffix の場合と大変類似した contraction を使う。'He's going.' これも他の suffix 同様 black English では消失の可能性がある。

他の多くの場合と同じく、nonstandard English で見られる過程は standard English と見做される speech の中でも見られる。誰でも状況が理想的であり、曖昧さを残さない場合には contraction を省く、例えば、早口で話しをする時には、'Where you going?' 'What you going?' 或いは 'Whatcha doin?' をためらう人は殆んどいない。nonstandard と standard English の違いは話者がより広範囲に亘ってかつしばしば deletion を行うということであり、その結果 'He going.' 'They a little late.' 'You a man.' は nonstandard black speaker の中では普通である。

このような文は standard speaker に nonstandard speaker には be 動詞が脱落しているという印象を与える可能性がある。このことで black English は欠陥言語とは決してならないが殆んど英語方言の正常な形態から著しく逸脱していることになるであろう。ロシヤ語には 'be 動詞相当語' はないが、そのために誰もロシヤ語は欠陥言語とは考えない。しかし、米国の nonstandard speaker は be 動詞を使えるし、又、実際にしばしば使用するのである。

この状況を理解するには 'be 動詞' の消失を standard English の contraction と関連させるとよい。standard English では、完全形及び縮約形という2つの形を持っているが black nonstandard English では deletion が行われる。

完全形	縮約形	除外
'You are in the park.'	'You're in the park.'	'You in the park.'
'We are sleepy.'	'We're sleepy.'	'We sleepy.'

black English でも 'I wonder where he is.' 'Where is he?' といった standard English では contraction が起らない所では deletion が行われぬ。'I'm' の形は standard English と同様 nonstandard English は生き残っている。結局、contraction に於いて standard English は 'is' と 'are' を半ば失ない、black English は deletion によって完全に失なっているのである。

### It's

suffix の弱化は black English と standard English の発音上の差違に関連し、又、そこから出てきたと見られる。final consonant が消失する時は suffix の存在も危くなる。その一つの例は 'it's' の使い方である。

Black English では standard English でも 'there is' 或いは 'there's' 又 'there was' という所に 'it is' 或いは 'it's' 又は 'it was' を使う。

'There is a school up there.' → 'It is a school up there.'

'There is a book on the desk.' → 'It is a book on the desk.'

となるが、よく見るとこれは1語の代置に過ぎず、文法形式の上に重大な変更を示していないが、standard English から逸脱して誤解を招く文を作り出す可能性が起きる。

'it is' と 'there is' の違いは rapid colloquial speech では、音が似ているため気づかれないことが多い。誰にも 's' a book on the table.' としか聞えない。更に、例え、standard speaker に 'it' が聞えてもその文は受容可能な standard English と合致するので奇異な感を与えない。standard speaker は 'It's a book on the table.' をそのまま受け取り、これが 'There is a book on the table.' と理解されるべき文とは認識しないかもしれない。しかし大抵の場合、適切でない表現をする人もいるという不安感を覚えるかもしれない。

‘there’の代りに‘it’を使う場合、standard Englishの受容範囲を越える文となるが、これらの文は‘it’を‘there’と読み替えると容易に理解が得られる。

‘It wasn’t nothing to do.’

‘It was all them chickens in the back there.’<sup>(2)</sup>

英語の方言は多くの点で違うが、しかし、standard と nonstandard English の形の間には、直接に対応する相当語があることは繰り返し見てきた。英語の単語及び文法の大部分は、両者共通であり、互に簡単に移し替えられるのである。ここで更に複雑な例に目を転じてみよう。

#### Multiple negation.

いわゆる‘double negative’は英語の中でもっとも厳しく非難されているものの一つである。

‘We don’t have nothing.’

‘She didn’t see nobody.’

などの表現を一つでも聞くと、多くの米国人は、その人には教育と洗練さが欠けていると考えてしまう。勿論、standard speakerには、このdouble negativeは自身は使用しないにしてもすぐ理解出来るのである。これは誰でも持つ受動的な知識であり、多くの米国人がよく使っている。それに対する態度はともかく、このため、double negativeは実際のアメリカ語の重要な特徴になっている。<sup>(3)</sup>

double negativeには非論理的な面があると考えられることが度々ある。即ち、2つのnegationは言語が乗算のように互に打ち消すと考えられている。しかし、ガソリンスタンドに行つて‘We don’t have no gas.’と言われて、2つのnegation互に打ち消しと考へてガソリンを入れてくれるのを待つという愚か者はいない。

‘We don’t have no gas.’は‘We don’t have any gas.’と同じで、前者は少し強くnegateしただけであると十分に理解出来る。言語が算数のような作用を持つと考へるのなら、乗算の代りにnegationを加算に譬えるべきである。加算では、2つのnegativeは消し合うことが決してないからである。勿論、3つのnegativeを持つ文になるとnegationを乗算とする考へ方は駄目になる。

‘I didn’t give none to nobody.’

乗算では3つのnegativeでもやはり1つのnegativeになり、‘double negative’と同様軽蔑される。

同一文の中に3つ、又はそれ以上のnegativeを持つ可能性があるため‘multiple negation’が‘double negation’より正確な術語であり、‘multiple negation’を使用する考へのないspeakerでも理解は容易であるから、‘multiple negation’がstandard Englishに近いのではないかと考へる。

以下はstandard speakerがnegationを作る自然な一般的な方法の例である。

#### Positive

Children can make me angry.

Then you should scream at them.

I’ve screamed at some of them.

You take it very seriously.

Their bad manners made me mad.

#### Negative

Children can’t make me angry.

Then you shouldn’t scream at them.

I haven’t screamed at any of them.

You don’t take it very seriously.

Their bad manners didn’t make me mad.

That makes me want to do something.	That doesn't make me want to do anything.
Somebody can make me angry.	Nobody can make me angry.
Then somebody should scream at someone.	Then nobody should scream at anyone.
Somebody's screamed at some of them.	Nobody's screamed at any of them.
Somebody takes it very seriously.	Nobody takes it very seriously.
Something made me mad.	Nothing made me mad.
Something makes me want to do something.	Nothing makes me want to do anything.

上記例文からすると, colloquial English の negation の作り方は2種類ある。最初の数例に見られるように 'can' 'should' 'have' などの助動詞の類に negative が付け加えられるし、助動詞がなければ 'do' 'did' 'does' といった語に negative が付け加えられる。

次も、もし文の subject が 'somebody' 'something' のような語であれば、別な構文が使われる。この場合助動詞の代りに subject が negate され、'somebody' 'something' はそれぞれ 'nobody' 'nothing' になる。'somebody' 'nobody' 'something' 'nothing' などの indefinite subject を negate するにはこの方法が要求される。

ここで negation の作り方を簡単に概括したい。

Rule 1, Basic Rule: To make a sentence negative, introduce the negative into the first possible position in the sentence. If an indefinite is found in the subject position, then that is made negative, otherwise the negative is inserted into the auxiliary position.

Rule 2, Right-Shift Rule: The negative can be shifted from the auxiliary position rightward to the next indefinite that follows.

<i>Positive Sentence</i>	<i>Negative by Basic Rule</i>	<i>Negative by Right-Shift Rule</i>
You can drink something strong.	You can't drink anything strong.	You can drink nothing strong.
We were trying something mild.	We weren't trying anything mild.	We were trying nothing mild.
The girl knows someone.	The girl doesn't know anyone.	The girl knows no one.
She looked somewhere for him.	She didn't look anywhere for him.	She looked nowhere for him.
He bought some peppermints.	He didn't buy any peppermints.	He bought no peppermints.
I want a part of linguistics.	I don't want any part of linguistics.	I want no part of linguistics.

Rule 3, Right-Copy Rule: A negative may be copied from the auxiliary or from an earlier indefinite into a later indefinite.

<i>Negative by Basic Rule</i>	<i>Negative by Right-Copy Rule</i>
You can't drink anything strong.	You can't drink nothing strong.
We weren't trying anything mild.	We weren't trying nothing mild.
The girl doesn't know anyone.	The girl doesn't know no one.
She didn't look anywhere for him.	She didn't look nowhere for him.
He didn't buy any peppermints.	He didn't buy no peppermints.

I don't want any part of linguistics.	I don't want no part of linguistics.
Nobody has any matches.	Nobody has no matches.
Nothing happened to anybody.	Nothing happened to nobody.
None of them went anywhere.	None of them went nowhere.

Rule 4, Right-Copy Rule, Extension One: A negative can be copied from an earlier into the following auxiliary.

<i>Negative by Basic Rule</i>	<i>Negative by Extension of Right-Copy Rule</i>
Nothing would happen.	Nothing wouldn't happen.
Nobody can see.	Nobody can't see.
Nobody knows.	Nobody don't know.
Nothing ever goes right.	Nothing don't never go right.
Nobody saw it.	Nobody didn't see it.

Rule 5, Right-Copy Rule, Extension Two: A negative can be copied from the main clause of a sentence and introduced into the auxiliary of the subordinate clause.

Well, wasn't much I couldn't do. (Well, wasn't much I could do.)

I told you, I don't believe there's no God. (I told you, I don't believe there's any God.)

It ain't no cat can't get in no coop. (There isn't any cat that can get in any coop.)<sup>(4)</sup>

以下は Negative Sentences の形成ルールのまとめである。

TABLE 3 Derivation of Negative Sentences

*Positive sentences*

- a. I want some.
  - b. He found some girls somewhere.
  - c. Something can happen.
  - d. Somebody's got something.
1. *Basic rule of negation*: Place a sign of negation in the first possible location in the sentence.
    - a. I don't want any.
    - b. He didn't find any girls anywhere.
    - c. Nothing can happen.
    - d. Nobody's got anything.
  2. *Right-shift rule*: Starting with sentences formed by Rule 1, move the negative from the auxiliary to the next succeeding indefinite (literary style).
    - a. I want none.
    - b. He found no girls anywhere.
    - c. (doesn't apply)
    - d. (doesn't apply)
  3. *Right-copy rule*: Starting with sentences formed by Rule 1, copy the negative into later indefinites (nonstandard).
    - a. I don't want none.
    - b. He didn't find no girls nowhere.
    - c. (doesn't apply)
    - d. Nobody's got nothing.

4. *Right-copy rule, extension one*: Starting with sentences formed by Rule 1, copy the negative from the preceding indefinite into the auxiliary (nonstandard).
  - a. (doesn't apply)
  - b. (doesn't apply)
  - c. Nothing can't happen.
  - d. Nobody ain't got nothing.
5. *Right-copy rule, extension two*: Copy a negative from the main clause into a subordinate clause (see above).

Rule 6, Subject-Auxiliary Flip-Flop: A negative subject can exchange positions with a negative auxiliary.

Don't nobody break up a fight. (Nobody breaks up a fight.)  
 Can't nobody tag you then. (Nobody can tag you then.)  
 Won't nobody catch us. (Nobody will catch us.)  
 Wasn't nobody home. (Nobody was at home.)  
 Ain't nobody complaining but you, man. (Nobody is complaining but you, man.)  
 Didn't nobody see it; didn't nobody hear it. (Nobody saw it; nobody heard it.)<sup>(5)</sup>

Rule 7, It Deletion: It may be deleted from the phrase it ain't when this comes first in the answer.

Ain't no book on the table.  
 Ain't nothing you can do.  
 Ain't nothing happening.

以上 Standard English と Black Nonstandard English の違いを Suffix 及び Negation Formation の見地より見てきたが、その区分を明確に行う十分信頼出来る基準は必ずしもなく、その使われる dialect も variety に富んでいる。しかし、American English の方向性を予測するために両者の比較研究に意義を見出すものである。

### Bibliography

- Dillard, J. L. 1972. *Black English: Its History and Usage in the United States*. New York: Random House.
- McDavid I. Jr., and Virginia Glenn McDavid. 1951. "The relationship of the Speech of American Negroes to the Speech of Whites." *American Speech* 26: 3-17.
- Labov, William. 1970. "The Study of Nonstandard English", National Council of Teachers of English.
- Major, Clarence. 1971. *Black Slang: A Dictionary of Afro-American Talk*. London: Routledge & Kegan Paul. Ltd.

### Notes

- (1) Labov, William, Paul Cohen, Clarence Robins, and John Lewis. 1968. *A Study of the Nonstandard English of Negro and Puerto Rican Speakers in New York City*. Vol. 1. Phonological and Grammatical Analysis p. 121.
- (2) *Ibid.*, p. 135.
- (3) *Ibid.*, p. 146.
- (4) *Ibid.*, p. 282-283.
- (5) *Ibid.*, p. 284-286.